

藤田嗣治 Les 7 Passions de Foujita 7つの情熱

10.3 金 - 11.9 日

| | |
|-------------------------|-------|
| Lui-même | 自己表現 |
| Le Ciel | 風景 |
| L'Avant-garde | 前衛 |
| L'Est et l'Ouest | 東方と西方 |
| La Femme | 女性 |
| Les Enfants | 子ども |
| Les Anges et le Paradis | 天国と天使 |

鹿児島市立美術館 KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

■開館時間/9:30~18:00 (入館は17:30まで)
■休館日/10/6(月)、14(火)、20(月)、27(月)

【主催】鹿児島市立美術館、南日本新聞社、MBC南日本放送
【協力】日本航空、(株)自由フランス大使館、アパレル・ファッション・ミュージアム
【企画協力】株式会社 ブレントラスト 【協賛】一般財団法人 総合センター
Commissariat général: Sylvie Rousseau, honoraire d'art et d'esport de Léonard Foujita

藤田嗣治 7つの情熱

2026 10/3 (金) ~ 11/9 (日)

「乳白色の肌」と繊細な描線により、1920年代フランス画壇の寵児となった藤田嗣治（レオナルド・フジタ / 1886 - 1968）。本展では、藤田研究の第一人者シルヴィー・ピュイッソン氏監修のもと、「自己表現」「風景」「前衛」「東方と西方」「女性」「子ども」「天国と天使」の7つの切り口から、藤田の人生と創作の源泉に迫ります。第2部では川島理一郎、東郷青児、海老原喜之助ら関わりの深い9人の日本人美術家も取り上げ、藤田が同時代に果たした役割を捉え直します。個人所蔵を含む国内外から集められた油彩、版画、水彩・素描、資料など、あわせて約160点をお楽しみください。（宝くじの助成を受けて実施しています）



藤田は明治半ばの1886年に生まれ、東京美術学校（現・東京藝術大学）を卒業後、26歳でフランスに渡りました。パリではピカソやモディリアーニらと交流しキュビズムなどの前衛芸術に触れ試行錯誤の日々を過ごした後、1920年代に「乳白色の肌」と称される裸婦像によって名を馳せました。1933年に帰国しますが、第二次世界大戦中に制作した戦争記録画により戦争責任を問われ1950年に再びフランスに渡ります。その後、1955年にフランスに帰化してレオナルド・フジタと改名。81歳で他界するまで精力的に制作を続けました。

2025年 秋号 No.35

発行 鹿児島市立美術館 〒892-0853 鹿児島市城山町4番36号 TEL(099)224-3400

市美だより

鹿児島市立美術館 | KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

あなたとわくわく マグマシティ 鹿児島市

無料開放日のお知らせ

毎月第3日曜日は、小・中学生は無料開放日です。所蔵作品展 + 小企画展を無料で鑑賞いただけます。

10月19日(日)
11月16日(日)

秋の所蔵品展 (西洋美術+郷土作家+特集コーナー)

ミニ特集: 令和6年度新収蔵品II 藤山ハンの世界

令和6年度に収蔵した新たな作品から、人形をモチーフにしたシリーズなどで独自の世界を描き続ける鹿児島市出身の画家・藤山ハンの作品を特集します。

藤山は青年期に北海道、東北地方への旅をきっかけに画家を志し、独学で絵画の道を歩きました。1960年代から、人形や屠殺の光景をモチーフに、内なる世界や、生と死を深く眼差す連作を描き始めます。その独特の表現は、見る者の心を強く揺さぶり、シュルレアリスムの詩人・画家の瀧口修造や、映画作家の دونالد・リチーらに高く評価されました。藤山の作品に通底するものとして、可視の世界と不可視の世界との往来があります。藤山は母の死に伴い訪れた奄美大島で、「見えていながら、どうしても見えないものの世界や、すぐ近くに有りながら、手の届かぬ深淵が、確かに存在する」という確信を経験したといえます。作品を見つめると、具象的な表象のなかに、かたちのないもの、目には見えぬものが浮かび上がってくるように感じられます。それはまた、見る者それぞれの内面と呼応するものでもあるでしょう。

このたび新収蔵されたのは、「人形」や「屠殺」シリーズといった1960~70年代の代表的な初期作品を中心に、「人形」シリーズの展開や、「ポスト」という新たなシリーズが生み出された90年代までの作品10点です。

また、収蔵後初公開となるこの機会のために、藤山ハン氏よりご寄稿や映像資料の提供をいただきました。寄稿文には、画業の歩みや瀧口修造との出会い、作品制作に対する思いなどがつづられています。作品とあわせてご覧ください。

《人とポストの肖像》
1999年

《人形の肖像》
1968年

《ピックアップ》所蔵品紹介

和田英作 《田園の夕暮れ》1920年
油彩・キャンバス、縦65.2×横80.3cm

どこか知らない土地の夕暮れ時。稲刈りが終わった田んぼと木立が描かれ、もうすぐ夕日が山の向こうにしずみ、あたりは闇につつまれていきそうです。

この絵の作者、和田英作は鹿児島県垂水市出身です。和田は黒田清輝に学び、のちに東京美術学校の校長になるなど外光派を代表する画家として活躍しました。

和田は「緑色は一つでない、木々の種類、森の遠近、日のあたり具合、四季、そんなもので違っている。何十何百の緑がある」と語っています。ここでは緑の話ですが、他の自然の色も一つではありません。この田園の絵からも和田が細かな自然の色彩の変化や光を表現しようとしていることがわかります。

夕暮れの空は、水色からやや黄色をおびながら、ほんのり茜色に染まるグラデーションで描かれ、そこに浮かぶ雲は、朱色と灰色で巧みに表現され、木立は黒色の深い緑色、山々の少し青みのある灰色など、静かな風景画には和田の色彩への強い想いがみられます。

ところで、もしこれが映画のワンシーンなら、これから何が起こると思いますか。人物、動物の登場、それとも妖怪? このまま静かに闇夜だけが広がっていくのもありそうです。和田の色彩のマジックから何か絵の中にひき込まれていくと思いませんか